

国立研究開発法人国立がん研究センター理事会（令和6年度第11回）議事概要  
日時：令和7年3月3日（月）10：30～11：50  
場所：国立がん研究センター 管理棟 第一会議室 ※Webex 使用  
出席者：中釜斉理事長、大島正伸理事、平沼直人理事、山内英子理事  
本田麻由美理事、小野高史監事、近藤浩明監事、瀬戸中央病院長、土井東病院長

## I. 前回（令和6年度第10回）議事録の確認

- ・前回議事録について了承。
- ・前回議事録署名人を本田理事と小野監事に依頼。

## II. 審議事項

### 1. 6カ年部門方針

資料に沿って報告された。

#### 【主な意見等】

- ・今回から審議概要のフォーマットを作成したことにより、立案者の考えもまとまり、理事の方々も責任を果たしやすくなったと思う。6カ年部門方針についても、事業計画と中長期計画もセットで求められているので妥当だと思うが、各部門について部門の中で優先されるテーマを絞り、一覧にするとわかりやすいのでご検討いただきたい。
- 検討させていただく。
- ・100ページの「世界のがんセンターを目指し、将来を見据えた戦略的な投資」と書かれているが、アメリカでは NIH や研究費の削減、研究者が退職せざるを得ない世界的なサイエンスを揺るがすことが起こっている。日本でも影響が起こることは十分に考えられるが、海外で研究している日本人がビザの関係で日本に戻って来ざるを得なくなったり、日本に活躍の場を求めてくるなど様々な可能性として、世界で置かれている状況における世界のがんセンターを目指す立場について、6カ年部門方針に入れることは難しいと思うがどのように動いているのか。
- 8ページ以降の研究所について、世界の未解決な問題にチャレンジして極めて独創性の高い研究となっており、世界に伍して研究が進められている。人材や研究費については、世界とのスピードに負けずに動いている。引き続き研究費の獲得、病院については、国の診療報酬、補助金関連も厳しい状況ではあるが、人材確保のための人件費底上げを含め必要な対応を進める。
- 国際戦略、国際連携は強化してきた。米国以外にも、ヨーロッパ諸国、東南アジア諸国と連携を通して研究開発の課題に取り組んできた。米国からの財源が入っていることは非常に限定的であるため影響はそれほどない。人的な交流については影響する可能性はあるが、米国だけではなく、ヨーロッパ諸国、東南アジア諸国とも連携しているので、調整しながら進めていきたい。また、研究開発については、ドラッグラグやドラッグロス、新しい薬剤において、米国の企業やベンチャーと連携を進めているので、今後の影響を見据えながら進めていきたい。現状、財政的な依存度は高くはなく、人的な依存度についても適宜交流しているのである程度見込めるが、財政基盤の下振れの部分について、そこを盤石のものにしながら取り組んでいくのが課題である。
- ・6カ年部門方針は、公表されている中長期目標に沿ったものという理解でよいか。また、非公表と公表されている違いについて。
- 基本的には中長期目標に沿ったものになっている。部門方針では各部門で努力目標を含めた内部目標を高く掲げ、策定している。
- センター内で高い目標を掲げて進めていくことは大変素晴らしいことだと思う。また、研究部門でも患者さんと国民と共に歩んでいることを強く打ち出していきたい。

-中長期計画は、研究開発法人の6つのNCとして、全体の整合性を取るようになっていいる。  
中期目標の中の数値目標を達成するためには、その他の部分も数値を設定しながら進め、センター内で共有をし、中期目標のゴールに向けて効率的、効果的に進める内容となっている。

### III. 報告事項

#### 1. 国立がん研究センター・鶴岡連携研究拠点第3期プロジェクトについて 資料に沿って報告された。

##### 【主な意見等】

- ・審議事項と報告事項の運用方針について。
- 執行役員会の審議事項については、細かい規定はなく幅広く審議事項を扱っている。理事会の審議事項については、業務方法書に関する事項、中長期計画、年度計画に関する事項、財務諸表等に関する事項、その他センターの業務運営に関する重要事項が審議事項となっている。その他の重要事項に当たるかについては、過去の理事会の前例を参考にしながら企画経営部において決めている。今回の件については、センター全体に関わる事項ではあるが、個別の事業であること、また過去の理事会でも審議事項ではなかったため、今回も報告事項として整理した。
- ・センターとしての目標は何になるのか。また、派遣されている研究者の今後について。
- 山形県及び鶴岡市と協議会があるので、最終的な目標も積み合いながら、KPIを定めて今後の事業を進めていく。派遣されている研究者については、ノウハウを後輩の方々に与えるなど、有効な活用についてはセンター内で検討していく。
- メタボローム解析領域は、疾患の早期診断や予防の観点から、その疾患が形作る前の患者個人の代謝状況を把握する研究領域であり、非常に重要だと認識している。決まったSOPの下で行うことが重要であり、解析機能が充実していた鶴岡と慶応拠点のサイエンスパークの連携は意味があると理解した。その成果が、研究者の育成、さらには地域の発展創生に繋がることを意識して、プロジェクトが立ち上がった。第1期、第2期、第3期に向けてその内容が少しずつ変遷しているが、結果的に国の追加的な補助や支援を受けて人材を育成するとともに、研究者のキャリアも意識しながら取り組んできた。実際に薬の開発や臨床試験に繋がっている。予防に繋げることについては、当センターのコホート研究とも引き続き連携をしながら、今後も十分に議論していく。
- ・山形県及び鶴岡市にとって、どのようなメリットがあるのか。
- 128ページの産業振興センターの職員の声に、国の機関と連携することによる事業の信頼性を実感されているとある。地域との連携、診療連携、遠隔治療の今後の展開を鶴岡市から発信できるという点において、地方自治体としての期待もある。
- 庄内病院で遠隔診療をしているが、地方では外科医が育成できないため、都会に行ってしまう研修医が来なくなったが、この遠隔ナビゲーションシステムを用いることで、当センターの技術が庄内病院でも学ぶことができ、昨年度からレジデントが充足している。

#### 2. 政府の会議の状況

資料に沿って報告された。

#### 3. 広報実績等

資料に沿って報告された。

#### 4. 法人カードのテスト運用（試行）継続と開始について

資料に沿って報告された。

#### 5. 投資委員会報告

資料に沿って報告された。

#### 6. 1月分医業件数等

資料に沿って報告された。

##### 【主な意見等】

- ・中央病院の手術件数の減少について。
- 特定の診療科で初診患者数の減少や、職員の退職や病欠によって手術が入らなかった。また、長時間手術の増加により短時間手術が入らなかった影響もあった。